HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	応答の教育としての阿部ヤエ伝承論 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	岡, 幸江
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 乙第7099号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78150
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Sachie_Oka_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（教育学）　　氏　名　岡幸江

審査担当者　主査　教　授　宮崎 隆志
副査　教　授　白水　浩信
副査　准教授　辻智子
副査　教　授　安藤耕己（山形大学）

学位論文題名

応答の教育としての阿部ヤエ伝承論

本論文は、岩手県遠野市における伝承者・阿部ヤエの実践の展開を丹念に追うことにより、伝承を、生きる意味を探求するための働きかけとして把握し、応答の教育として特徴づけることを試みたものである。筆者は、この教育を、第一に、昔話やわらべうたは、言葉によって直接的に表現される意味を伝達するものではなく、それらの背後に広がる歴史性を有する生活世界や意味世界を提示することによって、そこに埋め込まれた価値や生き方の方向性の意識化を促すものとして整理している。第二に、この教育において獲得が期待されている知を、現実の生活に向き合う中で想起されるものであり、また生涯にわたる探求によって顕在化するものとして把握した。そして、第三に、そのような教育空間を構成するための能動的な働きかけを行う実践者たる伝承者を教育者として位置付けた。

このような理解に立脚し、筆者は、従来の伝承論や子育て習俗論に対しては、近代社会と共同体社会の二分法的理解に基づくために現代にまで通じる教育実践としての価値の把握に難点があると批判する（序章）。他方、「記憶と一体化した歴史の終焉」（岩本通弥）として特徴づけられる現代の観光・文化政策や学校教育の文脈においては、伝承は記憶の場（場所や作法等）を再現することと結び付けて理解されるようになったと指摘し、その状況を生活世界から遊離した「制度化された伝承観」に基づくものと批判的に評価する（第一章）。それに対し、阿部ヤエの伝承は、「意味としての伝承」として特徴づけられている。

これら以下の手続きによって析出されたものである。第一に、阿部ヤエが行った伝承の体系化の試みの解析である（第二章第一節）。ここでは「わらべうた」「昔話」「謎かけ」が相互に前提しながら、読み解かれるべき意味の世界を構成していたことが明らかにされている。第二に、阿部ヤエが、０歳から 11 歳になるまでのある子どもとのかかわりを収めた映像資料の分析から、伝承を通じた阿部の意味世界と、それに応答する子どもの姿を確認している（第二章第二節）。第三に、阿部ヤエの学習過程に焦点を置きながら、伝承者としての自己形成過程をたどることによって（第三章）、阿部ヤエの人生における経験の意味が伝承の意味世界を探究する自己学習とのかかわりの中で見いだされていったことを明らかにし、そこにおける学習 の循環的構造を示した。第四に、阿部ヤエの人生の軌跡を読み解くことによって（第四章）、伝承の意味世界に根ざすことは、時代状況に向き合い自律的に生き方を編成することを可能にする抵抗の精神を育むことでもあることを指摘し、民衆として生きることを支える教育論としての伝承の

教育論の意義を明らかにしている。

これらの分析の妥当性は、当事者である阿部ヤエが自身の伝承活動の意味を確かめるために行った伝承に関する「研究」活動（元唄探しや保育実践記録の分析）によって、伝承を「人の一生を育てる」行為として自己了解していく論理と照合する（第五章）ことによって確認されている。

本論文の意義は、第一に、伝承の教育学的意味の分析を通じて、過去・現在を生きる多様な他者との応答に基づく自己形成論を剔出したことにある。生活の経験を通した自己形成論は社会教育論としては珍しくないが、本論文は経験を通して読み取られる意味世界そのものに着目し、そこでの応答的いとなみが、人の一生にわたる生き方を方向付けるものであることを明らかにした。生活そのものに埋め込まれた指導性、あるいは逆に指導性を有する生活という把握は、社会教育学にとどまらず生活指導論や文化的再生産論などにも新たな理論的視座を提供するものである。

第二に、過去と現在に亘る他者との応答を可能にする空間を編成する者としての伝承者の位置と意味を明らかにすることによって、教育者像の拡張がなされている点である。P.フレイレとの対比で言えば、銀行型教育における知識の伝達者としての教師とも、課題提起教育における共同探求者としての教師とも異なり、生活者が一生をかけて問い続け、意味を探求できる空間を創出する教育者像である。本論文が抽出した教育者像は、これまでの理論的カテゴリーの再考を迫り、インフォーマル教育論における教育者像の探求に資するものとして、国際的にも参照されるべき価値がある。

しかしながら、そのような理論的境地を確実に切り開くには、阿部ヤエの実践が有する普遍性について慎重な吟味が必要である。阿部は進学を諦め、家を継ぎ地域に生きるという生き方を余儀なくされたことにより、伝承による意味空間を受容し自己形成を図ったと見ることも可能であるが、抵抗の精神の形成過程をそこに読み取るには、阿部が近代に対して採った主体的戦略の生成論理とその普遍的な意味を客観的に説明することが求められる。それにより、伝承がすたれた地域においても、自己形成のための意味空間の形成を支援するインフォーマル教育の論理が成り立つ条件や意義を示すことができるであろう。

とはいえ、そのような課題は、著者による阿部ヤエの伝承実践の掘り起こしによって初めて浮上したものであり、新たな学術的挑戦がもたらした成果でもある。以上の評価に基づき、著者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。